

弘前大は8日までに、北海道沖の千島海溝南部で17世紀と13〜14世紀に発生した二つの巨大地震について比較した結果、共に根室沖と十勝沖の断層付近で発生している共通点がある一方、13〜14世紀の地震は東側の

17世紀のような地震が発生した場合、青森県太平洋側に津波などの大きな被害を及ぼす可能性が高いのではないかと推測した上で「過去の地震を調査することで防災・減災につなげた」と強調する。

青森県太平洋側の被害 十勝沖の滑り量影響か

根室沖の断層の滑り量が大きくなっているのに対し、17世紀の地震では、西側の十勝沖の断層の滑り量がより大きかったことが分かったと発表した。同大理工学研究科岡田里奈助教は、

調査は産業技術総合研究所(茨城県つくば市)の研究グループと共同で実施。過去に北海道東部の霧多布湿原(浜中町)と当緑湿原(大樹町)に襲来した津波によって運ばれた砂や

弘大、過去の千島海溝南部地震から推測

泥、石の分布を基に断層モデルを構築し、津波の発生状況を検証した。

その結果、13〜14世紀の地震と17世紀の巨大地震では、十勝沖と根室沖で断層の滑り量が5〜10倍に達していることも判明。さらに13〜14世紀の地震は、速報で使うマグニチュードとは別に、地震の規模を精査したモーメントマグニチュード(MW)が8.6、17世紀の地震は8.8と推定されることも分かった。

研究では、千島海溝南部では全く同じ地震が発生しているのではなく、異なる滑り分布を持つ多様な地震や津波が繰り返されていると総括している。

(尾野海琴)